

琉歌の音数律が語形に与える制約

西岡, 敏

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

35

(終了ページ / End Page)

75

(発行年 / Year)

1999-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012571>

琉歌の音数律が語形に与える制約

西岡 敏

[キーワード] 琉歌・音数律・音韻的変種・形態的変種・語彙的変種・長形・短形

0. はじめに

本稿では、琉歌形式という文学形式が、どのように言語形式を制約するかを見ていきたい。すなわち、琉歌形式の音数律に合わせるために、琉歌において、どのような変種の語形が具体的に存在するかを探っていきたいと思う。

琉歌は多くが8・8・8・6拍という形式の音数律を持つ。^(註1) 本稿ではこの韻律形式を「琉歌形式」と呼び、最初の8拍を「第1句」、次の8拍を「第2句」、3番目の8拍を「第3句」、最後の6拍を「第4句」と呼ぶことにする。琉歌の用例は、島袋盛敏・翁長俊郎1968の『琉歌全集』から引用する。「全521」で、『琉歌全集』歌番号521番を表す。

琉歌において、8拍の第1～3句は、5拍+3拍、ないしは3拍+5拍で語形が構成され(千葉聡1998:52はこれについてリズム論からの考察を行っている)、5拍は、さらに3拍+2拍、ないしは2拍+3拍の単位に分けられることがある。ところが、4拍+4拍というように語形を4拍ずつ区切る例はほとんどない(全1402第3句が、そのわずかな例外の一つ)。また、6拍の第4句も、3拍+3拍で語形を構成するのが大部分で、2拍+4拍に語形を分析できる若干の例外を除いて(→例(1)全521、例(57)全1164、全11)、4拍で語形を区切ることはほとんど見られない。このように、琉歌には4拍単位での区切りを避ける「4拍禁止制約」がある(さらに言うなら、1拍、4拍、7拍といった1+3n拍での区切りが回避されるということかもしれない)。

琉歌形式では、語形を音数律に合わせる事が優先され、同一の内容を表現するのに異なる語形を用いることがある。たとえば、「涙」という語は、琉歌において「ナミダ」[namida]と発音されるときと、「ナダ」[nada]と発音されるときがある。

全 816: あはれさめ朝夕 落てるわが涙 石の袖やても 朽たぬおきゆめ
第2句(8拍): ウティル ワガ ナミダ [ʔutiru waga namida]

全2353: 昔ごとと言ちゆて 涙流すごとに 我身もあとあんす されらとめば
第2句(8拍): ナダ ナガス グトゥニ [nada nagasu gutunji]

この場合、「ナミダ」[namida]は本土語(標準日本語)と同形で3拍、「ナダ」[nada]は沖縄語(首里方言)と同形で2拍となっている。この差異を使い分けることによって双方とも1句8拍の音数律に合致させることができる。

このような拍数の調節方法から、琉歌の創作には、長短の語形の差異が巧みに利用されている面があるといえよう。口語的な日常語の「ナダ」[nada]のみならず、文語的な歌謡語の「ナミダ」[namida]が用いられる一要因として、音数律の要請があることはまちがいない。この種の音数律の適合化については、沖縄古語大辞典編集委員会1995のいくつかの見出し語項目に記述がなされているが、本稿ではより体系的な記述を目指していきたい。

琉歌形式の音数律に合わせるために、語形がどのような変種を持つかを、まず便宜的に次のようにまとめてみた。長い語形(以下、「長形」と呼ぶ)と短い語形(以下、「短形」と呼ぶ)の一例を↔で対比して挙げた。それぞれ語形の長さが1拍異なっている。

	長形		短形	
1. 音韻的変種				
①語彙的な語(自立語)	ニウイ	↔	ニキ	(匂い)
	[njiui]		[njiwi]	
②文法的な語(付属語)	ティヤリ	↔	テイ	(引用の助詞、〜と)
	[tijari]		[tei]	
③文法化する語 (自立語→付属語)	シチ ウウン	↔	シチュン	(している。)
	[sjicji wuN]		[sjicjuN]	
2. 形態的変種				
	サチャイ	↔	サチ	(咲いて、)
	[sacjai]		[sacji]	
3. 語彙的変種				
	ウトゥ	↔	ニ	(音)
	[’utu]		[nji]	

音韻的変種は①②③のいずれの語にも見られるが、音韻的変種内部の①②③の区別はさして重要ではなく、みなに共通の音規則によって説明が可能である。音韻的、形態的、語彙的に分類したそれぞれの変種においても、どの変種に属するのか判断に苦しむものもある(→例(68)(73)(75)など)。

1. 音韻的変種

音韻的変種は、理論的には、「音の脱落・短縮による音数律の適合化」、「音の付加・伸長による音数律の適合化」といった二つの適合化が考えられる。

「音の脱落・短縮」とは、音変化によって音が脱落または短縮している「短形」と、音変化阻止によって音が脱落または短縮していない「長形」とを使い分けることにより、句を構成するときの必要な拍数に合致させることである(西岡敏1997: 45-49でも、喜界島八月踊り歌テキストにおける音変化・音変化阻止と音数律の関係を述べている)。

「音の付加・伸長」とは、逆に、音が付加または伸長していない「短形」と、音が付加または伸長している「長形」を使い分けることによって必要な拍数に合わせることである。実際には、音の付加・伸長による音数律適合化の良い例は見つけられなかった。

1. 1. 音の脱落・短縮による音数律の適合化

1. 1. 1. 狭母音の脱落

1. 1. 1. 1. i系音の脱落

日常語(首里方言)では、母音 [i] の脱落する語が、琉歌においては脱落しなかったり、逆に日常語(首里方言)で脱落しない語が、琉歌では脱落してしまうことがある。音脱落しない「長形」と音脱落した「短形」の使い分けで拍数を合わせるわけである。

以下より具体的な用例を挙げていくが、例番号の直後に掲げる語は、沖縄古語大辞典編集委員会1995『沖縄古語大辞典』の見出し語にできるだけ做ったものである。㊦(助詞)や㊦㊦(助動詞)などの略号も、同様にしてそれに做う。複合語的要素の区切れは、-(ハイフン)を用いて示す。本稿では、複合語性が高い語について、複合語後部要素の「語頭音脱落」(apheresis)とは見ずに、複合語における「語中音脱落」(syncope)と見る。^(註2) 琉歌の例は、上段に長形、下段に短形という順に掲げる。

(1) いき-あふ【行き会う】([i]の語頭音脱落) 下例はテ形(上段)と過去尾略形(下段)

長形: イチャ-[icja-] 短形: チャ-[cja-]

全 451: 御縁あて弟ぎや いきやて嬉しさや うちはれて遊べ わぬも遊ば

第2句(8拍): イチャティ ウリシサヤ [icjati 'urisjisaja]

全 521: けふのほこらしやや なをにぎやなたてる つぼでをる花の 露きやたごと

第4句(6拍): ツィユ チャタ グトゥ [ciju cjata gutu]

(2) いか【如何】([i]の語頭音脱落)

長形: イチャ [icja] 短形: チャ [cja]

全 510: 暁やなゆり いきやおさうずめしやいが 別るさめとめば 袖の涙

第2句(8拍)：イチャ ウソズィ ミシエガ [‘icja ’usozi misjega]

全 354：染めてあるかなの あだなゆめやすが もしかながらへて 朽たばきやしゆが

第4句(6拍)：クタバ チャシュガ [kutaba cijasjuga]

(3) しら-いと【白糸】([i]の語中音脱落)^(註3)

長形：シライトウ [sjira’itu] 短形：シラチュ [sjiracju]

全 455：一期自由ならぬ 事や白糸に 紺染めよ染めて 朽たす心気

第2句(8拍)：クトウヤ シライトウニ [kutuja sjira’itunji]

全 208：赤糸貫花や 里にうちはけて 白糸貫花や よゑれわらべ

第3句(8拍)：シラチュ ヌチバナヤ [sjiracju nucjibanaja]

(4) いな【早】([i]の語頭音脱落)

長形：イナ [’ina] 短形：ニャ [nja]

全 489：むつれ遊びゆたす いな昔なため 振合ちやる今日や 昔語らひ

第2句(8拍)：イナ ンカシ ナタミ [’ina Nkasji natami]

全 808：高離島や 物知らせどころ にや物知やべたん 渡ちたぼうれ

第3句(8拍)：ニャ ムヌ シヤピタン [nja munu sjijabitaN]

(5) いのち【命】([i]の語頭音脱落)

長形：イヌチ [’inucji] 短形：ヌチ [nucji]

全2367：寄りつめる年に 無蔵や先立てて 朝顔の命 くらしかねて

第3句(8拍)：アサガウヌ イヌチ [’asagaunu ’inucji]

全2539：心しち飲めば せわごと忘すて 酒や命のべる 薬やすが

第3句(8拍)：サキヤ ヌチ ヌビル [sakija nucji nubiru]

(6) いみ-あり【いみ有り】([i]の語頭音脱落) 下例は連体形(いらっしやる)

長形：イメル [’imeru] 短形：メル [meru]

全1712：錦うち重ね いまる日ど我身や 朝夕肝の願 お待ちしやべる

第2句(8拍)：イメル フィドゥ ワミヤ [’imeru hwidu wamija]

全1379：月の夜も夜ゑ 闇の夜も夜ゑ 里がいまる夜ど にや夜さらめ

第3句(8拍)：サトゥガ メル ユルドゥ [satuga meru jurudu]

(7) いみ-おはる【いみ御座る】([i]の語頭音脱落) 下例は命令形(いらっしやい)

長形：イモリ [’imori] 短形：モリ [mori]

全2741：恩納松下に 禁止の牌の立たば 越えて久志辺野古 忍でいもうれ

第4句（6拍）：シヌディ イモリ [sinudi 'imori]

全2199：夕間暮やかはて ここてるさあもの 忍でまうれ互に 語て遊ば

第3句（8拍）：シヌディ モリ タゲニ [sinudi mori tagenji]

(8) -いろ【色】（[i] の語中音脱落）

長形：イル ['iru] 短形：-ル [-ru]

全 821：眺めてもあかぬ 白菊の花の 露の色そへて 咲きやるきよらさ

第3句（8拍）：ツイユヌ イル スイティ [cijunu 'iru suiti]

全 503：諸鈍めやらへの 雪のろの齒口 いつか夜のくれて み口吸はな

第2句（8拍）：ユチヌルヌ ハグチ [jucjinurunu hagucji]

(9) つき-よ【月夜】（[i] の語中音脱落）^(#4)

長形：ツイチュ [cicjiju] 短形：ツイチュ [cicju]

全1390：旅の夜の寝覚め 十六夜の月夜 友までて鳴きゆら 夜半の千鳥

第2句（8拍）：イザユイヌ ツイチュ ['izajuinu cicjiju]

全 199：月夜や月夜ともて 明ける夜や知らぬ わらべ腕枕 にやうちほれて

第1句（8拍）：ツイチュヤ ツイチュ トウムティ [cicjuja cicju tumuti]

(10) に-や圃（[i] の語中音脱落） 助詞「に」+助詞「や」

長形：ニヤ [njija] 短形：ニャ [nja]

全 651：そだてたる里や この世にやをらぬ 誰たので咲きやが 無情の菊や

第2句（8拍）：クヌユニヤ ウウラヌ [kunjunjija wuranu]

全2890：夜や夢通ひ 昼や肝通ひ わが胸の中や まどにやならぬ

第4句（6拍）：マドウニャ ナラヌ [madunja naranu]

(11) め-わらべ【女童】（[i] の語中音脱落）

長形：ミヤラビ [mijarabi] 短形：ミャラビ [mjarabi]

全2388：浦浦の深さ 名護浦の深さ 名護のめやらへの 思い深さ

第3句（8拍）：ナグヌ ミヤラビヌ [nagunu mijarabinu]

全 724：あがり立つ雲や 世界報しによくゆり 遊びしによくゆる はたち 二十めやらべ

第4句（6拍）：ハタチ ミャラビ [hatacji mjarabi]

(12) 継続形（テヲリ形、[i] の語中音脱落） 下例は終止形（上段）と連体形（下段）

長形：テ形+居り 短形：テ居り融合形

全2493：上ても行かば たんであまこまに 岩乗しちをんで 語て呉れやう

第3句（8拍）：ガンジュ シチ ウウンディ [gaNzju sjicji wuNdi]

全 298：よそめ恥しちど 思まぬふりしちゆる 忘れめ恋路 年やよても

第2句（8拍）：ウマヌ フリ シチュル ['umanu hwuri sjicjuru]

継続形（「～している」の意）は「動詞テ形+居り」に由来する。琉歌では「テ形|居り」を区切ってよむ発音と、「テ居り」を融合させてよむ発音とがあり、これによって伸縮が可能になっている。

(13)保存形（テオク形、[i] の語中音脱落） 下例は已然形+バ

長形：テ形+置ク 短形：テ置ク融合形

全2873：庭の手水鉢の 蓋あけておけば 案内なく月の お宿めしやうち

第2句（8拍）：フタ アキティ ウキバ [hwuta 'akiti 'ukiba]

全1347：打置けば鳴ゆめ 提げとけば鳴ゆめ 里が持ちなしど 我胴や持ちゆる

第2句（8拍）：サギトウキバ ナユミ [sagitukiba najumi]

保存形（「～しておく」の意）は「動詞テ形+置ク」に由来する。琉歌では「テ形|置ク」を区切ってよむ発音と、「テ置ク」を融合させてよむ発音とがある。

無声摩擦音を含む音（フィ [hwi]、シ [sji]）も日常語（首里方言）では脱落することがあり、そのような語にも伸縮が行える。

(14)ひと【人】（[hwi] の語頭音脱落）

長形：フィトゥ [hwitu] 短形：チュ [cju]

全 415：蘭の勾心 朝夕思とまれ いつまでも人の あかぬごとに

第3句（8拍）：イツィマディン フィトゥヌ ['icimadiN hwitunu]

全2775：しやんま小ややとて 人のしやんま笑て いやあやつとめとめ よくのしやんま

第2句（8拍）：チュヌ シャンマ ワラティ [cjunu sjaNma warati]

(15)ひと-【一】（[hwi] の語頭音脱落）

長形：フィトゥ-[hwitu-] 短形：チュ-[cju-]

全 73：あけやうくらさらぬ とまいて着きをも お門に出ぢめしやうれ 一目をがま

第4句（6拍）：フィトゥミ ウウガマ [hwitumi wugama]

全 838：聞けば仲里や 花の本てももの 咲き出らば一枝 持たちたばうれ

第3句（8拍）：サチディラバ チュイイダ [sacjidiraba cjujida]

(16)ひとり【一人】([hwi]の語頭音脱落)

長形：フィチュイ [hwiçjui] 短形：チュイ [çjui]

全 357：たのむ夜やふけて おとづれもないらぬ 一人山の端の 月に向かて

第3句(8拍)：フィチュイ ヤマヌファヌ [hwiçjui jamanuhwanu]

全2756：官話大和口 沖縄物語 一人話し話し ぴりんぱらん

第3句(8拍)：チュイ ハナシ バナシ [çjui hanasji banasji]

(17)はしり【走り】([sji]の語中音脱落)

長形：ハシリ [hasjiri] 短形：ハイ [hai]

全1638：お船の綱とれば 真鱸吹き送て いまるの梶歌へば 虎のはしり

第4句(6拍)：トゥラヌ ハシリ [turanu hasjiri]

全1705：とらの方の風に とらの日に出ぢやち とらの走りしめて とらの門口

第3句(8拍)：トゥラヌ ハイ シミティ [turanu hai sjimiti]

(18)もも-とし【百年・百歳】([sji]の語尾音脱落)^(#5)

長形：ムムトゥシ [mumutusji] 短形：ムムトゥ [mumutu]

全1754：百歳の渡中 しがらみは立てて いつも年波や 寄らぬあらな

第1句(8拍)：ムムトゥシヌ トゥナカ [mumutusjinu tunaka]

全1755：百歳年寄の うち笑ていまるす これど世栄の しるしさらめ

第1句(8拍)：ムムトゥ トゥシユイヌ [mumutu tusjjuinu]

(19)シサ形容詞([sji]の語中音脱落) 下例は「うれしさ」のサ語幹。

長形：ウリシサ [ʼurisjisa] 短形：ウリシャ [ʼurisja]

全 560：うれしさのあまり まことでも思まぬ もしか思尽す 夢やあらね

第1句(8拍)：ウリシサヌ アマリ [ʼurisjisjanu ʼamari]

全 404：打ち鳴らし鳴らし 四つ竹は鳴らち 今日や浜出ぢて 遊ぶうれしや

第4句(6拍)：アスィブ ウリシャ [ʼasibu ʼurisja]

「うれしさ」「かなしさ」などいくつかの「シサ形容詞」には、形容詞の基本的な形であるサ語幹(沖縄古語大辞典編集委員会1995:784-785)に、「～シサ」[-sjisa]の長形と、それが音融合した短形「～シャ」[-sja]とがある。

1. 1. 1. 2. u系音の脱落

母音[u]も、[i]と同じく、脱落の有無によって語形を伸縮させることができる。

(20)-うち【内】([u] の語中音脱落)

長形：-ウチ [-'ucji] 短形：-チ [-cji] ^(註6)

全1068：この間や小舟 風ままになれて なまや川内に いかりとめて

第3句（8拍）：ナマヤ カワウチニ [namaja kawa'ucjinji]

全 494：西のさな登て 真南向かて見れば ましらこに見ゆる 里が殿内

第4句（6拍）：サトウガ トウヌチ [satuga tunucji]

(21)-うみ【海】([u] の語中音脱落)

長形：-ウミ [-'umi] 短形：-ミ [-mi]

全2864：後海のしさい 取るものやあらぬ 仲村渠かまど 波にもまち

第1句（8拍）：クシウミヌ シサイ [kusji'uminu sjisai]

全1129：深さある故ど 波風も立ちゆる 浅海こぎ渡れ 恋の小舟

第3句（8拍）：アサミ クジワタリ ['asami kuzjiwatari]

(22)-うら【浦】([u] の語中音脱落)

長形：ウラ ['ura] 短形：-ラ [-ra]

全 277：仲島の浦の 冬のさびしさや 千鳥鳴く声に 松のあらし

第1句（8拍）：ナカシマヌ ウラヌ [nakasjimanu 'uranu]

全 422：瓦屋つちのぼて 真南向かて見れば 島の浦ど見ゆる 里や見らぬ

第3句（8拍）：シマヌラドゥ ミユル [sjimanuradu mijuru]

(23)うらめしさ【恨めしさ】([u] の語頭音脱落)

長形：ウラミシ ['uramisji] 短形：ラミシヤ [ramisja]

全1339：仲島の小橋 渡て恨めしや 恋のかけはしや 渡りぐれしや

第2句（8拍）：ワタティ ウラミシヤ [watati 'uramisjija]

全1211：昔袖振たる 花の物語 与所に聞きなしゆる 年の恨めしや

第4句（6拍）：トウシヌ ラミシヤ [tusjinu ramisja]

全1339の「ウラミシヤ」[uramisjija] は、基本語幹「ウラミシ」[uramisji]+詠嘆の終助詞「ヤ」[-ja]と分析する。全1211の「ラミシヤ」[ramisja] はサ語幹。[u] の脱落しないサ語幹の「ウラミシサ」[uramisjisa] または「ウラミシヤ」[uramisja] の例は見つけられなかった。

(24)うゑる【植える】([u] の語頭音脱落) 下例は連用形（上段）とテ形（下段）

長形：ウキ-['uwi-] 短形：ゐ-['wi-]

全1277：百敷のお庭に 植ゑしげる竹の 節節に君が よはひこめて

第2句（8拍）：ウキシジル ダキヌ ['uwisjizjiru dakinu]

全2851：わやの西東 銭木植ゑてあもの なりのどもならば 持たち呉らゑ

第2句（8拍）：ジンギ ゐティ アムヌ [zjiNgi 'witi 'amunu]

この例は、1. 1. 2. の範疇にも入れられるかもしれない。

(25)-おと【音】（[u] の語中音脱落）

長形：-ウトウ [-'utu] 短形：-トウ [-tu]

全 409：干瀬にうち寄せる 波音もないらぬ でかやう慰みに 出でて遊ば

第2句（8拍）：ナミウトウン ネラヌ [nami'utuN neranu]

全2988：冬(1)の山らしの 音に驚きやり 追かける敵の 足音(2)ともて

第4句（6拍）：アシトウ トウムティ ['asjitu tumuti]

(26)わ-おや【我親】（[u] の語中音脱落）^(註7)

長形：ワウヤ [wa'uja] 短形：ワヤ [waja]

全 770：節節がなれば 木草だいも知ゆり 人に生まれとて 我親知らね

第4句（6拍）：ワウヤ シラニ [wa'uja sjiranji]

全 885：旅や浜宿り 草の葉ど枕 寝ても忘ららぬ 我親のおそば

第4句（6拍）：ワヤヌ ウスバ [wajanu 'usuba]

(27)し-をる【為居る】（[u] の語中音脱落）

長形：シュユル [sjujuru] 短形：シュル [sjuru]

全1331：わがしゆゆる恋や 干瀬に打つ小波 寄り着きやんとめば 別て行きゆさ

第1句（8拍）：ワガ シュユル クイヤ [waga sjujuru kuija]

全2091：のがすどくかにある 我身のしゆる恋や 思尽すことの 果てやないらぬ

第2句（8拍）：ワミヌ シュル クイヤ [waminu sjuru kuija]

「し-をる」は、動詞「す」【為】のヲリ語幹（2. 1. 2.）の連体形。[sjiworu]→[sjiwuru]
→ [sjujuru]（長形）→ [sjuru]（短形）という音変化が想定されうる。

(28)しより【首里】（[u] の語中音脱落）

長形：シュユイ [sjujui] 短形：シュイ [sjui]

全 122：波(1)の声もとまれ 風(2)の声もとまれ 首里天がなし みおんき拝ま

第3句（8拍）：シュユイ ティンガナシ [sjujui tiNnganasji]

全1286：虎頭松山の 松の葉の数に かけて願やべら 首里のお果報

第4句（6拍）：シュイヌ ウクワフ [sjuinu 'ukwahwu]

【首里】は、『おもろさうし』のかな表記では「しより」と書かれ、「まだま」【真玉】（3拍）などの対語との対応を考えると（松永明 私信）、おもろ語としては3拍の[* sijjuri]が再構されうる。琉歌語には上記のように長形「シュユイ」[sjujui]と短形「シュイ」[sjui]がある。日常語（首里方言）では「シュイ」[sjui]で、短形と同じ形をしている（国立国語研究所1963：491）。

(29)きのふ【昨日】（[u]の語尾音脱落〔[uu]の短縮〕）

長形：チヌウ [cjinuu] 短形：チヌ [cjinu]

全1575：昨日今日とめば いな秋もすぎて 木草枯れはてる 冬になため

第1句（8拍）：チヌウ チュウ トゥミバ [cjinuu cjuu tumiba]

全2293：昨日見ちやる鏡 今日取やり見れば 知らぬ年寄の まからまうちやが

第1句（8拍）：チヌ ンチャル カガン [cjinu Ncjaru kagaN]

「チヌ」[cjinu]という短形は、「語尾音脱落」と言うより、むしろ琉歌において長母音を禁止する「長音禁止制約」（西岡1996：44）の適用で母音が短縮された形と言うべきかもしれない。

[hwu] や [zu] の脱落の有無で、語形の伸縮を行う例もある。

(30)ふた-【二】（ふた）（[hwu]の語頭音脱落）

長形：フタ-[hwuta-] 短形：タ-[ta-]

全 169：二葉から出でて 幾年が経たら 巖抱き松の もたえさかえ

第1句（8拍）：フタバカラ んジティ [hwutabakara 'Nzjiti]

全1149：山ごとに秋や 紅葉葉の二色 雁やいつ着きやが 鳴きよ渡る

第2句（8拍）：ムミジバナ タイル [mumizjibanu ta'iru]

(31)ふたり【二人】（[hwu]の語頭音脱落）

長形：フタリ [hwutari] 短形：タイ [tai]

全1829：い言葉のごとに 節待たなすれば 二人定まらぬ 玉の命

第3句（8拍）：フタリ サダマラヌ [hwutari sadamaranu]

全 700：なびくなやうよその 袖とやり引きも 二人がいことばの 朽たぬ限り

第3句（8拍）：タイガ イクトゥバナ [taiga 'ikutubanu]

(32)お-ふね【御船】([hwu] の語中音脱落)

長形：ウフニ ['uhwunji] 短形：ウニ ['unji]

全1704：虎に羽つけて 飛ぶよりも早く 雲に馳せ入ゆる 按司のお船

第4句(8拍)：アジヌ ウフニ ['azjɪnu 'uhwunji]全 23：だんじよかれよしや 選でさし召しやいる お船の綱とれば 風やまとも第3句(8拍)：ウニヌ ツィナ トゥリバ ['unjɪnu cina turiba]

沖縄古語大辞典編集委員会1995：583には「おふね」で立項されているが、本稿では全1704の訓み「ウフニ」['uhwunji]を尊重し、「お-ふね」【御船】で出すことにした。^(注8)

(33)づま【何処】([zu] の語頭音脱落)

長形：ズマ [zuma] 短形：マ [ma]

全1726：北京お主てだや づまにそなれよが 七つ星下の 北京ちよしま第2句(8拍)：ズマニ スナリユガ [zumanji sunarijuga]全2293：昨日見ちやる鏡 今日取やり見れば 知らぬ年寄の まからまうちやが第4句(6拍)：マカラ モチャガ [makara mocjaga]

1. 1. 2. [u i] の短縮 ([w i] へ)

2拍の [ui] と、1拍の [wi] による使い分けの例もかなりある。もともと2拍だった語が、音変化によって [wii] あるいは [wi] の要素を持つようになり、[wii] も「長音禁止制約」によって琉歌では [wi] と短く発音されるようになっている。「1. 1. 1. 2. u系音の脱落」と重なり合う部分がある (→例(24)(38)など)。

(34)うへ【上】([ui] : [wi])

長形：ウイ ['ui] 短形：ゐ ['wi]

全 348：しなさけど頼む 誰が上になても 忘れてやり言ちも 思まぬおきゆめ第2句(8拍)：タガ ウイニ ナティン [taga 'uinji natiN]全 390：わが身つで見ちど よその上や知ゆる 無理するな浮世 なさけばかり第2句(8拍)：ユスヌ ゐヤ シユル [jusunu 'wija sjijuru]

(35)おもひ【思い】([ui] : [(w)i])

長形：ウムイ ['umui] 短形：ウミ ['umi]

全 332：あさましや思ひ 定めても変る たのみがたなさや 人の心第1句(8拍)：アサマシヤ ウムイ ['asamasija 'umui]全 370：情ある露ど 花の上や降ゆる 真実の思の あだになゆめ

第3句（8拍）：シンジツィヌ ウミヌ [sjiNzjicinu 'uminu]

(36)-くれ【暮れ】（[uri] : [wi]）

長形：-グリ [-guri] 短形：-グィ [-gwi]

全2846：夜のあけててだの 上り初めから 仲間節一節 日暮れまでも

第4句（6拍）：フィグリ マディン [hwiguri madiN]

全 638：聞けばさびしきや 夕間暮れとつれて たたく山寺の 鐘の音声

第2句（8拍）：ユマングィトウ ツィリティ [jumaNgwitu ciriti]

(37)こえる【越える】（[ui] : [wi]） 下例はテ形

長形：クィティ [kuiti] 短形：クィティ [kwiti]

全 239：名護の大兼久 山入端も越えて 今帰仁の城 なまどつきやる

第2句（8拍）：ヤマニユファン クィティ [jamanjuhwaN kuiti]

全2068：七門越えて九門に わないお待ちしゆすが なまで来ぬ里や にやよそつれて

第1句（8拍）：ナナジョ クィティ クジョニ [nanazjo kwiti kuzjonji]

(38)こゑ【声】（[ui] : [wi]）

長形：クィ [kui] 短形：クィ [kwi]

全 191：春や花盛り 深山鶯の 句しのでほける 声のしほらしや

第4句（6拍）：クィヌ シュラシャ [kuinu sjurasja]

全 122：波の声もとまれ 風の声もとまれ 首里天がなし みおんき拝ま

第1句（8拍）：ナミヌ クィン トウマリ [naminu kwiN tumari]

長形は「クキ」[kuwi] の発音も可能であるらしい（全1333第4句、全1404第3句など）。

(39)にほひ【匂い】（[ui] : [wi]）

長形：ニウイ [njiui] 短形：ニキ [njiwi]

全 287：人にあることの 隠さらぬあすや 闇の夜の梅の 匂さらめ

第4句（6拍）：ニウイ サラミ [njiui sarami]

全1159：^{ちか}近さたるがけて 油断どもするな 梅の葉や花の 匂や知らぬ

第4句（6拍）：ニキヤ シラヌ [njiwija sjiranu]

1. 1. 3. 広母音の短縮

1. 1. 3. 1. 母音融合と関わるもの

日常語（首里方言）では [ai] などから [ee] へと音変化するものが、琉歌では起こって

ない場合がある。このような [ee] への音変化阻止も、音数律を合致させるための使い分けといえる。[ee] は琉歌の「長音禁止制約」によって1拍の [e] と短縮されるため、2拍と1拍で語形の伸縮ができる (synizesis)。

(40)いはひ【祝い】([ai] : [e])

長形：イワイ ['iwai] 短形：イエ ['iwe]

全 717：うれしきや庭の 竹の節節に 君が万代の 祝こめて

第4句 (6拍)：イワイ クミティ ['iwai kumiti]

全1717：八十八月の 祝の面影も ひきよせて見ゆさ 今日の座敷

第2句 (8拍)：イエヌ ウムカジン ['iwenu 'umukajiN]

(41)いらへ【応え】([ei] : [e])

長形：イレイ ['irei] 短形：イレ ['ire]

全 814：浜の浜ながいし わが呼びやり泣きも のよで一言も いらへすらぬ

第4句 (6拍)：イレイ スィラヌ ['irei siranu]

全 655：塚に手よかけて わが呼びやり泣きも 後生に落てつきやめ いらへもすらぬ

第4句 (6拍)：イレン スィラヌ ['ireN siranu]

全 814 の「いらへ」を、「イライ」['irai] と発音することもできるのかもしれない。

(42)ならひ【習い・慣い】([ai] : [e]) ^(註9)

長形：ナライ [narai] 短形：ナレ [nare]

全1268：会者定離の慣ひ 知らぬ恨めしや 馴れ染めて二人 別る心気

第1句 (8拍)：イィシャジョリヌ ナライ [jisjazjorinu narai]

全 553：三重城にのぼて 手巾持上げれば 走船のならひや 一目ど見ゆる

第3句 (8拍)：ハイフニヌ ナレヤ [haihwunjinu nareja]

(43)よはひ【齢】([ai] : [e])

長形：ユワイ [juwai] 短形：ユエ [juwe]

全1694：鶴亀と松に 齢くなべとて 千歳見だれれやう 果報なお主前

第2句 (8拍)：ユワイ クナビトゥティ [juwai kunabituti]

全1678：七八十までや 並並の齢 米の齢越えて 百のお祝

第3句 (8拍)：ユニヌ ユエ クイティ [junjinu juwe kuiti]

(44)わらひ-【笑い】([ai] : [e])

長形：ワライ-[warai-] 短形：-ワレ [-ware]

全 105：謝敷女童の 花まさり姿 笑ひ顔みれば あおちやくさい

第3句（8拍）：ワライガウ ミリバ [waraigau miriba]

全 96：謝敷板干瀬に うちやり引く波の 謝敷めやらへの 目笑ひ齒茎

第4句（6拍）：ミワレ ハグチ [miware hagucji]

(45)ま-はへ【真南風・真南】([ai] : [e])

長形：マファイ [mahwai] 短形：マフェ [mahwe]

全2895：沖や北風吹きゆり 根瀬や南風吹きゆり 加那が懐や 真南風吹きゆり

第4句（6拍）：マファイ フチュイ [mahwai hwucjui]

全1242：梅や花咲きゆり 庭や雪降ゆり 無蔵がふちよころや 真南ど吹きゆる

第4句（6拍）：マフェドゥ フチュル [mahwedu hwucjuru]

全2895は、もとは大島民謡であるが、首里方言に即して訓む場合でも、【南風】は「フェエ」[hwee] より「ファイ」[hwai] のほうが、「ニシ」[njsji] などと母音 [i] で脚韻を踏んでいて良いと思う。この歌には他にもいろいろと押韻が駆使されているが、脚韻に関係するところのみを以下の囲み線に示す。^(註10)

'u ci ja nji si hwucju □
 nji si ja hwa □ hwucju □
 kanaga hwucjukuruja
 mahwa □ hwucju □

(46)て-やり[㊦] ([tijari] : [tei])

長形：ティヤリ [tijari] 短形：テイ [tei]

全 364：照る月のきよらさ 潮汲まんてやり おしつれて浜に 出でて行きゆん

第2句（8拍）：シュウ クマン ティヤリ [sjuu kumaN tijari]

全 593：産子ふやかれて 飛ばんてやりすれば あちやや母とまいて 泣きゆらとめば

第2句（8拍）：トゥバン テイ スィリバ [tubaN tei siriba]

て-やり[㊦]は引用の助詞で、「ティヤリ」[tijari]（3拍）と「テイ」[tei]（2拍）の両方の発音が可能である。短形「テイ」[tei] は、長形「ティヤリ」[tijari] から音変化した形であろう（[tijari] → [teei] → [tei]）。

(47)確証形（テアリ形） 下例は連体形

長形：テ形+有リ 短形：テ有リ融合形

全 759：朝夕うみつなぎ 掛けてあるかせに 色深くかなの 染まなおきゆめ

第2句（8拍）：カキティ アル カシニ [kakiti 'aru kasjinji]

全2717：あんぐわたやよかて いな夫も持ちゆり 我身やなまわらべ 酒ど盛てある

第4句（6句）：サキドゥ ムテル [sakidu muteru]

確証形（「してある」の意）は「動詞テ形+有り」に由来する。例(12)(13)と同じく、「テ形|有り」を区切ってよむ発音と、「テ有り」を融合させてよむ発音とで音数律の適合化を行っている。

(48)まへ【前】（[ee] の短縮）

長形：メエ [mee] 短形：メ [me]

全1358：目の前の契り しゆんともてをるな あの世までわぬや 頼でをもの

第1句（8拍）：ミヌメエヌ チジリ [minumeenu cjiziri]

全 114：油買うてたばうれ じはも買うてたばうれ 捨て夫の見る前 みなでしやべら

第3句（8拍）：スティウツウヌ ミルメ [sitiwutunu mirume]

まへ【前】には、「メエ」[mee]という長形と「メ」[me]という短形がある。「メエ」[mee]は音数律を優先させて「長音禁止制約」が適用されなかった形である。一方、「メ」[me]のほうは音数律に適合させるため、「長音禁止制約」を適用した形である。

(49)あふぎ【扇】（[oo] の短縮）

長形：オオジ ['oozji] 短形：オジ ['ozji]

全 541：三重城にのぼて 打ち招く扇 またもめぐり来て 結ぶ御縁

第2句（8拍）：ウチマニク オオジ ['ucjimanjiku 'oozji]

全 188：夏の日も秋の 情通はちゆて 手になれし扇の 風のすださ

第3句（8拍）：ティニ ナリシ オジヌ [tinji narisji 'ozjinu]

あふぎ【扇】にも、長音を含む長形「オオジ」['oozji]がある。

(50)いや𠬪（[aa] の短縮）

長形：やア ['jaa] 短形：や ['ja]

全2722：いやあがわぬ思て なきやんてやり蚊 片足も出ぢやす 暇やないらぬ

第1句（8拍）：やアガ ワン ウムティ ['jaaga waN 'umuti]

全2934：いえ木いやが島や 名護糸国頭糸 やぐめさも知らぬ お床のぼて

第1句（8拍）：エブク やガ シマヤ ['ebuku 'jaga sjimaja]

2人称単数代名詞「いや」にも、長音を含む長形「やア」['jaa]がある。

「まへ」「あふぎ」「いや」(さらに例(29)「きのふ」も含めて)の諸例は、「長音禁止制約」が「音数律制約」よりも強くないことを示している。「長音禁止制約」は、あくまでも音数律から食み出る長音を短くするだけであって、音数律に合致していればそのままの長音でかわらない。^(#11)

音数律制約 > 長音禁止制約

1. 1. 3. 2. w音脱落と関わるもの

日常語(首里方言)では、母音[a]に挟まれたw音は脱落して[aa]となるが、琉歌では脱落が阻止されることがある。脱落しない長形[awa]と、[w]の語中音脱落による短形[a]（「長音禁止制約」で短縮）とによって音数律を合致させることができる(syneresis)。

(51)せめ-なは【責め縄】([w]の語中音脱落)^(#12)

長形：シミナワ [sjiminawa] 短形：シミナ [sjimina]

全1923：義理の責め縄も 急ぎ朽ち果てて わが自由になゆる 浮世やらな

第1句(8拍)：ジリヌ シミナワ^ン [zjirinu sjiminawa^N]

全2515：浮世のがともて 我自由しやんすれば 恨めしや朽たぬ 義理の責縄

第4句(6拍)：ジリヌ シミナ [zjirinu sjimina]

(52)-まはり【回り】([w]の語中音脱落)

長形：-マワイ [-mawai] 短形：-マイ [-mai]

全1341：真福地のはいちやうや 行き回り^{回り} こまに根ざす また回り^{回り} 元に根ざす

第2句(8拍)：イチマワイ マワイ ['icjimawai mawai]

全1955：里前思ゆんで がまこやせ果てて 二回り^{あり}ある帯の 三回りなたさ

第3句(8拍)：タマイ アル ウビヌ [tamai 'aru 'ubinu]

(53)やま-かは【山川】([w]の語中音脱落)

長形：ヤマカワ [jamakawa] 短形：ヤマガ [jamaga]

全 552：那覇の親泊 おしたてるはしら 大和山川に ひけよはしら

第3句(8拍)：ヤマトウ ヤマカワニ [jamatu jamakawanji]

全 551：那覇からや出ぢやち けふ三日どなゆる いつの間に着きやが 山川港

第4句(6拍)：ヤマガ ンナトゥ [jamaga Nnatu]

(54)おもは-よりか【思おうよりか】([w]の語中音脱落)

長形：ウマフユイカ [‘umawajuika] 短形：ウマユイカ [‘umajuika]

全2052：とても打ち殺せ 惜しむ身やあらぬ 一人焦がれとて 思はよりか

第4句（6拍）：ウマフ ユイカ [‘umawa juika]

全 692：捨てられてあとの くつき思まよりか ご縁あるうちに ゆるちたばうれ

第2句（8拍）：クツィサ ウマユイカ [kucisa ‘umajuika]

1. 1. 3. 3. 語形成に関わるもの

複合語の前部要素が母音 [-a] で終わり、後部要素が [‘a-] で始まる場合、そのままの長さを保持して [-a‘a-] と発音される場合と、1拍短縮されて [-a-] と発音される場合とがあり (synaloepa)、音数律適合化の役割を果たしている。

(55)やま-あらし【山嵐】([‘a‘a] の短縮)

長形：ヤマアラシ [jama‘arasji] 短形：ヤマラシ [jamarasji]

全 624：のがやう山嵐 咲き出ゆる花の ひとさかり待たな 吹きよ散らす

第1句（8拍）：ヌガヨ ヤマアラシ [nugajo jama‘arasji]

全 621：冬の山嵐や 足元もつまて 肝も肝ならぬ あげやういきやなゆが

第1句（8拍）：フユヌ ヤマラシヤ [hwujunu jamarasjija]

次の-あたり【当たり】も類例だが、短形の例しか見つからなかった。

(56)-あたり【当たり】([‘a‘a] の短縮)

短形：-タイ [-tai]

全2101：花当の里前 花持たちたばうち 花持たさよりか 御胴いもうれ

第1句（8拍）：ハナタイヌ サトゥメ [hanatainu satume]

(57)シサ形容詞の活用 ([‘a‘a] の短縮) 下例は連体形

長形：シャ+有り 短形：シャ有り融合形

全1907：かにくりしやあるゑ 哀れ思無蔵が 別れ路の袖に すがて泣けば

第1句（8拍）：カニ クリシャ アルイ [kanji kurisja ‘arui]

全1164：渡られる浮世 渡ららぬ舟に 乗たるこの我身ど 百恨めしやる

第4句（6拍）：ムム ラミシャル [mumu ramisjaru] (#13)

「～しさ」の「シサ形容詞」は、サ語幹に「有り」を補って活用を行うが、例(12)(13)(47)と同様、「シャ|有ル」[-sja ‘aru]を区切ってよむ発音と、「シャ有ル」を融合させて「シャル」[-sjaru]とよむ発音とがある。

1. 2. 音の付加・伸長による音数律の適化

今までは、音が脱落・短縮される具体例を見てきた。これとは逆に、琉歌の単語そのものの内部において、音の付加・伸長によって音数律合致をもたらしている適例は見つけられなかった。「まん-なか」【真ん中】「マンナカ」[maNnaka] が、撥音「ン」[N] の付加として、候補に挙げられるかもしれないが、短形に当たる「ま-なか」【真中】「マナカ」[manaka] の琉歌例がない（沖縄古語大辞典編集委員会1995：615,625）。

(58) まん-なか【真ん中】

長形?：マンナカ [maNnaka]

全2734：大中の大瀬 道の真中に 幾代あめあられ ふても居ちゆさ

第2句（8拍）：ミチヌ マンナカニ [micjinu maNnakanji]

2. 形態的変種

形態的変種とは、形式は異なるが同様の意味を持つ要素が付いたり、冗長的な上位語（包摂語）や語彙的意味をほとんど失った接辞が付いたりすることによって生み出される語形のバリエーションのことである。これら変種を「活用語に関する変種」、「助詞（格標識を含む）に関する変種」、「上位語または接辞の付加に関する変種」の三つに分類した。

2. 1. 活用語に関する変種

2. 1. 1. アリ形：テ形

動詞のアリ形（「動詞連用形+有り」に由来）とテ形（沖縄古語大辞典編集委員会1995では「接続形」と呼ぶ）は、双方とも「～して、」という同様の意味を持っている。以下の例(59)においては、第4句に「アスイバ」[’asiba]（遊ぼう）が来ているが、その前にある動詞を見ると、一つ（上段）にはアリ形、もう一つ（下段）にはテ形を用いている。

(59) 「～して、」を意味する動詞形

長形：アリ形 短形：テ形

全 61：月も照りきよらさ 糸とまいれ童 露の玉ひろて 貫きやり遊ば

第4句（6拍）：ヌチャイ アスイバ [nucjai ’asiba]

全 18：けふのよかる日に 昔どしいきやて 嬉しさや互に 語て遊ば

第4句（6拍）：カタティ アスイバ [katati ’asiba]

上段のアリ形「ヌチャイ」[nucjai] をテ形「ヌチ」[nucji] にしてしまうと、「ヌチ アスイ

バ」[nucji 'asiba] となり、5拍で1拍足りない。逆に、下段のテ形「カタティ」[katati] をアリ形「カタヤイ」[katajai] にしてしまうと、「カタヤイ アスイバ」[katajai 'asiba] となり、7拍で1拍多すぎる。すなわち、ちょうど6拍に合致するように、アリ形とテ形を使い分けているのである（喜界島八月踊り歌テキストにおける音数律適合化にも同じ手法があることを、西岡1996：51-53では述べている）。

2. 1. 2. ヲリ語幹：基本語幹

次に動詞の語幹の違いで拍数の調節を行っている例を見ていきたい。次に掲げる「降る」の例は、上段がヲリ語幹の連体形、下段が基本語幹の連体形である。

(60)ふる【降る】

長形：フユル [hwujuru] (ヲリ語幹活用) 短形：フル [hwuru] (基本語幹活用)

全1458：降ゆる春雨に 野辺の百草も みどりさしそへて 盛るうれしや

第1句（8拍）：フユル ハルサミニ [hwujuru harusaminji]

全2130：降る雨にたよて 笠に顔隠ち 忍で行く心 よそに知らぬ

第1句（8拍）：フル アミニ タユティ [hwuru 'aminji tajuti]

基本語幹活用は、音変化を別にすれば、本土語（標準日本語）と同様と考えてよいだろう。一方、ヲリ語幹活用の由来は動詞連用形に「居り」が後接したもので、当初は「～している」という継続的なアスペクトを示していたと考えられるが、現在の日常語（首里方言）でそのアスペクト的な意味は無くなっている。また、琉歌語でも『琉歌全集』全1458の解説に、「フユル」[hwujuru] に「降っている」ではなく、「降る」という解釈がなされている。すなわち、「フユル」[hwujuru] を使っても「フル」[hwuru] を使っても意味的には同じことを言い表している。とすると、これらの例における「フユル」[hwujuru] と「フル」[hwuru] の使い分けは、専ら音数律を合致させるためであるという主張が成立する。この場合、短形の「フル」が文語的歌謡語、長形の「フユル」が口語的日常語の位置を占める。

2. 1. 3. 連体形：尾略形（準連体形）

動詞の活用形の違いによって音数律に適合させる例がある。以下は双方とも後ろに「ばかり」㊦「ピケイ」[bikei] が続く例だが、一方では「過去・連体形」、他方では「過去・尾略形（準連体形）」が用いられている。尾略形（準連体形）が連体形よりも1拍少ないことによって音数律にうまく合致する。

(61)「ピケイ」（ばかり）に係る動詞形

長形：連体形 短形：尾略形（準連体形）

全2667：若狭町ですも 名付けたるばかり 買ひ戻ち見ちやる 人やをらぬ

第2句（8拍）：ナズィキタル ビケイ [sazikitaru bikei]

全2789：鷹の鳥ですも 空に飛だばかり 暁の鶏や 国の宝

第2句（8拍）：スラニ トウダ ビケイ [suranji tuda bikei]

2. 1. 4. 未然形+ン：未然形（志向形）

以下は双方とも後ろに「と-おもひて」【と思て】「トゥムティ」が続く例だが、一方では「未然形+ン」（「ン」[-N]）は、推量・意志の助動詞「む」（助動）によって、他方では未然形（志向形）のみによって、「～しよう」（意志）の意味を表している。「ン」の1拍分の出し入れで、音数律に合致させることができる。

(62) 「～しよう」（意志）を意味する動詞形

長形：未然形+ン 短形：未然形（志向形）

全2957：今宵おめさまし がらめかんともて 産子引きつれて 出ちて行きゆん

第2句（8拍）：ガラミカン トウムティ [garamikaN tumuti]

全2277：恨む比謝橋や わぬ渡さともて 情ないぬ人の かけておきやら

第2句（8拍）：ワン ワタサ トウムティ [waN watasa tumuti]

2. 1. 5. 已然形+バ：已然形

以下の例は、一方では「過去・已然形+バ」によって、他方では「過去・已然形」のみによって、「～したら」という条件節を示している。「バ」の1拍分の出し入れで、音数律に合致させることができる。

(63) 「～したら」（条件）を意味する動詞形

長形：已然形+バ 短形：已然形

全2761：糕菓子がやらともて あけたればえまづ だのやちやうもならぬ 桃と漬菜

第2句（8拍）：アキタリバ エマズィ ['akitariba 'emazi]

全1688：たんかなて花の きぬくすて見ちやれ よかてさめ鶴や 千代の姿

第2句（8拍）：チン クスィティ ンチャリ [cjiN kusiti Ncjari]

なお、日常語（首里方言）では、「已然形+バ [-ba]」の [b] が脱落し、音融合して [-ee] の要素を持つ。そうすると、全1688の「見ちやれ」は、[Ncjaree] から「長音禁止制約」を経た「ンチャレ」[Ncjare] と訓まれる可能性を考慮すべきかもしれない（音韻の変種）。あ

るいは、琉歌の語法では、単に、「バー」[-ba]なしの已然形単独による条件節ができるということなのかもしれない。

2. 1. 6. ラ行四段化一段系動詞：四段系動詞

動詞活用の種類の違いも、音数律の適合化に役立つことがある。「わかれる【別れる】」「うらめる【恨める】」など、元来は一段動詞活用であったけれどもラ行四段動詞活用との類推によって「わかれらぬ(別れない)」「うらめらぬ(恨まない)」のように活用する動詞を「ラ行四段化一段系動詞」と呼び、「わかる【別る】」「うらむ【恨む】」などのように、元から四段動詞活用である動詞を「四段系動詞」と呼ぶことにする。例(64)は、上段がラ行四段化一段系動詞の活用、下段が四段系動詞の活用の用例である。

(64)わかれる【別れる】：わかる【別る】 下例はテ形

長形：ワカリティ [wakariti] 短形：ワカティ [wakati]

全 317：別れても互に ご縁あてからや 糸に貫く花の 散りて退きゆめ

第1句(8拍)：ワカリティン タゲニ [wakaritiN tagenji]

全 713：拜でなつかしやや まづせめてやすが 別て面影の 立たばきやしゆが

第3句(8拍)：ワカティ ウムカジヌ [wakati 'umukazjinu]

ラ行四段化一段系動詞の活用のほうが、四段系動詞の活用よりも1拍多く稼げるために、音数律の合致にうまく使い分けができる。同じ例として、「わすれる【忘れる】・わする【忘る】」、「うらめる【恨める】・うらむ【恨む】」、「ちれる【散れる】・ちる【散る】」などを挙げることができる。

動詞に限らず、可能的助動詞「れる」(ラ行四段化一段系活用)と「る」(四段系活用)にも平行的なことが言える。

(65)れる【助動】：る【助動】 下例は未然形

長形：-リラ-[-rira-] 短形：-ラ-[-ra-]

全2720：いかも釣られらぬ 魚も釣られらぬ 崎樋川の沖に のろんとろん

第1句(8拍)：イカン ツィラリラヌ [ikaN cirariranu]

全2904：これまでよとめば すててもどららぬ 心くらやみに なるが心気

第2句(8拍)：スティティ ムドゥララヌ [sititi mudurarānu]

2. 1. 7. グトゥニ：グトゥ

琉歌語で「～のように」という副詞的な比況表現には、ごと【如】「グトゥ」[gutu] とい

う基本語幹と、ごとに【如に】「グトゥニ」[gutunji] というニ形があり、その1拍の差が音数律合致のために有効に働いている。

(66) ごと【如】

長形：グトゥニ [gutunji] 短形：グトゥ [gutu]

全2932：婆前小つら見れば 口汁のたゆさ 梅干のごとに わぎでをこと

第3句（8拍）：んミブシヌ グトゥニ ['Nmibusjinu gutunji]

全 118：伊集の木の花や あんきよらさ咲きゆり わぬも伊集のごと 真白咲かな

第3句（8拍）：ワヌン イジュヌ グトゥ [wanuN 'izjunu gutu]

2. 1. 8. ネラヌ：ネヌ

現在の日常語（首里方言）には「無い」に当たる形式に「ネーン」[neeN] と「ネーラン」[neeraN] がある。「ネーン」[neeN] の [-N] は、['araN]（有らぬ）との類推で付いたものとされ、「ネーラン」[neeraN] の [-raN] も、[neeN] が出来て以降、また新しく['araN]（有らぬ）との類推が働いて付いたものとされる（伊波普猷1975[1933]：544-545）。琉歌語にも「ネラヌ」[neranu] と「ネヌ」[nenu] の両形式があり、音数律適合化のために使い分けられている面がある（西岡1993：37-38でも「ネラヌ」「ネヌ」の使い分けと音数律の関係を述べている）。

(67) なさ【無さ】

長形：ネラヌ [neranu] 短形：ネヌ [nenu]

全 623：夢にたづねても 音信もないらぬ あはれかたらたる 人の行衛

第2句（8拍）：ウトゥズィリン ネラヌ ['utuziriN neranu]

全 666：さらば立ち別ら よそ目ないぬうちに やがて暁の とひも鳴きゆら

第2句（8拍）：ユスミ ネヌ ウチニ [jusumi nenu 'ucjinji]

2. 1. 9. シチュティ：シュティ

「～せずして」に当たる表現として、琉歌語には、「未然形+ナ[-na] シチュティ[sjicjuti]」と「未然形+ナ[-na] シュティ[sjuti]」などがある。「シチュティ」は「して+居りて」、「シュティ」は「し+居りて」と別々に由来するか、あるいは、「シュティ」は「シチュティ」の音変化した形か（音韻的変種）決めかねている。金城朝永・服部二郎1955：335 に依拠して、[sicjuti] → [ssjuti] → [sjuti] という後者の音変化説を認めるべきかもしれない。

(68)して-をりて：し-をりて（くす【為】）

長形：シチュティ [sjicjuti] 短形：シュティ [sjuti]

全 670：あまりどく鳴くな 野辺のきりぎりす まさるわがつらさ 知らなしちゆて第4句（6拍）：シラナ シチュティ [sjirana sjicjuti]全 401：実れやう実れ茄子 姑の屋の茄子 実らなしゆて茄子 嫁名立ちゆめ第3句（8拍）：ナラナ シュティ ナスイビ [narana sjuti nasibi]

2. 1. 10. 疊語的形式

草稿の段階で、「ウチナラシ ナラシ」[ʼucjinarasji narasji]（全308第1句）「クリカインガイシ」[kurikaisji gaisji]（全1141第2句）などの疊語的形式に、音数律が深く関わっていることをどのように扱うのかという指摘を受けた（松永明 私信）。形態的変種の範囲で考えるなら、全体を疊語化した「ウチナラシ ウチナラシ」を長形、複合語の後部要素のみを疊語化した「ウチナラシ ナラシ」を短形とし、長形は拍超過なので存在しないという解釈もあろう。ただし、そうした語形の長短という観点だけでは説明しきれない部分も感じている。今後の課題にしたい（疊語による音韻的変種については、例(105)(106)参照）。

(69)疊語的形式

短形？：ウチナラシ ナラシ [ʼucjinarasji narasji]

全 308：打ち鳴らし鳴らし 四つ竹は鳴らち けふやお座出でて 遊ぶ嬉しや第1句（8拍）：ウチナラシ ナラシ [ʼucjinarasji narasji]

2. 2. 助詞（格標識を含む）に関する変種

2. 2. 1. 対格（ユ格：ゼロ格）

日常語（首里方言）では、対象となる語を示す対格表示を、何も付けないゼロ格で表すが、琉歌語では、そのほかに、よ匳「ユ」[ju] を後接させたユ格で表すことがある。この「ユ」は、本土語の助詞「を」と同根であろう。元来音数律を整えるためだけの「産み字」が対格標識化したという考え方も、可能性としては残るかもしれない。^(註14)

(70)よ匳の有無

長形：-ユ [ju] 短形：-φ（ゼロ）

全2366：寄よる年波の 後先よ見れば なまど百年の 渡中わたり

第2句（8拍）：アトウサチユ ミリバ [ʼatusacjiju miriba]

全2383：上泊のぼて 若狭町見れば いちゆた瀧原の 馬の走り

第2句（8拍）：ワカサマチ φ ミリバ [wakasamacjiφ miriba]

両例とも、第2句（8拍）において、「ミリバ」（3拍）へ続く語形には、5拍必要である。5拍名詞はゼロ格でよいが、4拍名詞はユ格を用いることで音数律を合わさねければならない。

2. 2. 2. 一人称単数属格

「私の」にあたる言い方には、長形「ワガ」[waga] と短形「ワ」[wa] がある。^(#15) 短形「ワ」[wa] は、日常語（首里方言）の「ワー」[waa] が「長音禁止制約」によって短縮されたものである。

(71) わ【我・吾】㊦

長形：ワガ [waga] 短形：ワ [wa]

全 751：急ぎ立ち戻ら 月も眺めたい 里やわが宿に 待ちゆらだいもの

第3句（8拍）：サトウヤ ワガ ヤドゥニ [satuja waga jadunji]

全 70：久米の五葉の松 下枝の枕 思童むざうや 我腕枕

第4句（6拍）：ワ ウディ マクラ [wa 'udi makura]

2. 2. 3. 向格（ンカイ格：カイ格）

向格を表すとき、琉歌語において、ンカイ [Nkai] 格とカイ [kai] 格の1拍差で音数律の適合化を行っているような例がある。

(72) に-かへ㊦：かへ㊦

長形：ンカイ [Nkai] 短形：カイ [kai]

全1987：首里にかりいまるら いやりわなひ頼ま 木綿引きゆたんで 語たてたばうれ

第1句（8拍）：シュインカイ イメラ [sjuiNkai 'imera]

全1072：沖繩かへいまるら 我身もさうていもうれ 我身一人残り いまるのなゆめ

第1句（8拍）：ウチナカイ イメラ ['ucjinkai 'imera]

両例とも、第1句（8拍）において、「イメラ」（3拍）へ続く語形には、5拍必要である。しより【首里】は、「シュユイ」（3拍）という特殊な長形を使って「シュユイカイ」という選択肢もあるかもしれないが、ここでは一般的な語の「シュイ」（2拍）に「ンカイ」（3拍）を後接させて5拍到合致させたほうが自然と見なされたのだろう。おきなは【沖繩】は、「長音禁止制約」で「ウチナ」と3拍になっても、「ンカイ」（3拍）を後接させると6拍で1拍超過するので、「カイ」（2拍）が選択されたといえる。^(#16)

2. 2. 4. 具格（シャイ格・シャニ格・シチ格：スイ格）

具格を表す際、現代の日常語（首里方言）では、「し（為の連用形）+有り+に」に由来するサーニ [sa:nji] 格と、「して（為のテ形）」に由来するッシ [ssji] 格がよく用いられる。琉歌語には、「し有り」に由来するシャイ [sjai] 格、「し有りに」に由来するシャニ [sjanji] 格、「して」に由来するシチ [sjicji] 格とスイ [si] 格がある。スイ格の「スイ」[si] は、琉歌で「す」と表記されているのでそう訓まれているが、「す」はシチ格が音変化した「ッシ」[ssji] の形を写したのものかもしれない。1拍異なっているシャイ格・シャニ格とスイ格の関係は、形態的変種と言ってよいが、同じく1拍異なっているシチ格とスイ格の関係は、音変化が意識されていると考えれば音韻的変種にも捉えられうる。

(73) し-あり[㊦]・し-あり-に[㊦]・して[㊦]

長形：シャイ [sjai]・シャニ [sjanji]・シチ [sjicji] 短形：スイ [si]

全 550：手巾持上げれば 与所の目のしげさ かしらとりなづけ 手しやい招け

第4句（6拍）：ティシャイ マニキ [tisjai manjiki]

全2850：我ぬ抱きゆる手しやに よそ抱きゆるやらば 飛るさきやことに ひしやそれれ

第1句（8拍）：ワン ダチュル ティシャニ [waN dacjuru tisjanji]

全2740：御しち御胴 たかべたる御胴 みたぬからからの やうんち小瓶

第1句（8拍）：ウンジュシチ ウンジュ [uNzjusicji uNzju]

全2200：夢うちにだいにす 恋のならばしや 袖す顔隠ち 忍で行きゆさ

第3句（8拍）：スディスイ カウ カクチ [sudisi kau kakucji]

2. 2. 5. 所格（ウットウティ格：ウウティ格）

所格を表す際の琉歌語には、「居りて+居りて」に由来するウットウティ [wututi] 格と、「居りて」に由来するウウティ [wuti] 格があり、1拍長さの異なる両形式の使い分けで音数律合致への調節ができるようになっている。日常語（首里方言）では「ウットウティ」に相当する形式が「ウットーティ」[wutooti]として、「ウウティ」に相当する形式がやはり「ウウティ」[wuti]として現れる。

なお、琉歌語や首里方言における具格や所格は、いずれもある動詞のテ形やアリ形が文法化して、格になったものである。その点では「2. 1. 活用語に関する変種」としての側面もある。

(74) をとて[㊦]：をて[㊦]

長形：ウットウティ [wututi] 短形：ウウティ [wuti]

全2822：船に馬置きやり 馬に真帆引かち 行かぬ先をとて 着きやさとまり

第3句（8拍）：イカヌ サチウウトウティ ['ikanu sacjiwututi]

全 642：この世をて里や 御縁ないぬさらめ 一人こがれとて 死ぬが心気

第1句（8拍）：クヌユウウティ サトウヤ [kunujuwuti satuja]

2. 2. 6. サラミ：サミ

琉歌語には、強意・感嘆を表す終助詞として「サラミ」[sarami]と「サミ」[sami]の形式がある。「サラミ」は「す（強意の係助詞）+有ら（「有り」未然形）+め（推量の助動詞「む」已然形）」、「サミ」は「す（強意の係助詞）+有（「有り」尾略形）+め（疑問・反語の終助詞「め）」と別々に由来するか、それとも、「サミ」は「サラミ」がただ縮約された形（音韻的変種）なのか（[sarami] → [saami] → [sami]?）確信が持てないでいる。いずれにせよ、両形の1拍の差によって音数律に合致させることができる。

(75)さらめ囀：さめ囀

長形：サラミ [sarami] 短形：サミ [sami]

全 715：十日越しの夜雨 草葉うるはしゆす おかけぼさへ御代の するしさらめ

第4句（6拍）：シルシ サラミ [sjirusji sarami]

全1132：ままならぬものや 恋路さめ人の 義理やそむからぬ 浮世やれば

第2句（8拍）：クイジサミ フィトゥヌ [kuizjisami hwitunu]

2. 3. 上位語または接辞の付加に関する変種

2. 3. 1. 上位語の付加

ある名詞（例えば「鮑」）にその上位概念の語（例えば「貝」）を補って、音数律を適合化させているような例がいくつか見受けられる。

(76)あはび-がひ【鮑貝】：あはび【鮑】 上位語：貝

長形：アワビゲ ['awabige] 短形：アワビ ['awabi]

全 212：袖や波下の 鮑貝がやゆら 夢の間の浮世 ひとりぬらち

第2句（8拍）：アワビゲガ ヤユラ ['awabigega jajura]

全 615：朝夕なれそめて あはれ片糸の 思ひいや増しゆる 海のあはび

第4句（6拍）：ウミノ アワビ ['uminu 'awabi]

(77)せんどう-しゅ【船頭主】：せんどう【船頭】 上位語：主

長形：シンドウシュ [sjiNdusju] 短形：シンドウ [sjiNdu]

全2584：船と船橋や 船頭主の気がけ 掟さばかりや 地頭代気がけ

第2句（8拍）：シンドウシュヌ チガキ [sjiNdu:sjunu cjigaki]

全2629：渡中おし出れば 船頭ままだいもの 真鱸のりめしやうれ お船の船頭

第4句（6拍）：ウニヌ シンドウ ['unjinu sjiNdu]

(78)もみぢ-ば【紅葉葉】：もみぢ【紅葉】 上位語：葉

長形：ムミジバ [mumizjiba] 短形：ムミジ [mumizji]

全1558：春の花ごころ あかぬ眺めゆす 秋の紅葉葉の 錦さらめ

第3句（8拍）：アチヌ ムミジバヌ ['acjinu mumizjibanu]

全1556：花の紅の 色よりもまさて 深く染めなちやる 秋の紅葉

第4句（6拍）：アチヌ ムミジ ['acjinu mumizji]

(79)ことひ-うし【特牛牛】：ことひ【特牛】 上位語：牛

長形：クティウシ [kuti'usji] 短形：クティ [kuti] (2拍差)

全2763：特牛の姿 見ちやめ思童 闇の夜に角の みとるごとき

第1句（8拍）：クティウシヌ スィガタ [kuti'usjinu sigata]

全 71：おほにしの特牛や なざちやらど好きゆる わすた若者や 花ど好きゆる

第1句（8拍）：ウフニシヌ クティヤ ['uhwunjisinu kutija]

(80)さくら-ばな【桜花】：さくら【桜】 上位語：花

長形：サクラバナ [sakurabana] 短形：サクラ [sakura] (2拍差)

全1438：流れゆる水に 桜花うけて 色きよらさあてど すくて見ちやる

第2句（8拍）：サクラバナ ウキティ [sakurabana 'ukiti]

全 207：白瀬走川に 流れゆる桜 すくて思里に ぬきやりはけら

第2句（8拍）：ナガリユル サクラ [nagarijuru sakura]

(81)はは-おや【母親】：はは【母】 上位語：親

長形：ファファウヤ [hwahwa'uja] 短形：ファファ [hwahwa] (2拍差)

全2967：夢うつつこころ 鬼虎の口も 凌ぎ母親よ 拝むことや

第3句（8拍）：シヌジ ファファウヤユ [sjinuzji hwahwa'ujaju]

全2979：朝夕うきくりしや 焦がれはて死なば 死出の山越えて 母よ拝ま

第4句（6拍）：ファファユ ウウガマ [hwahwaju wugama]

もちろん、「ちち-おや【父親】：ちち【父】」もこれと同じ関係である。(註17)

- (82)て-うで-まくら【手腕枕】：うで-まくら【腕枕】 上位語：手
 長形：ティウディマクラ [ti'udimakura] 短形：ウディマクラ [udimakura]
 全 880:こひん小のお酒 仲人のたまし かまど小と我身や 手腕枕
 第4句(6拍)：ティウディ マクラ [ti'udi makura]
 全 70:久米の五葉の松 下枝の枕 思童むざうや 我腕枕
 第4句(6拍)：ワ ウディ マクラ [wa 'udi makura]

2. 3. 2. 接頭辞「イ」[i]の付加

接頭辞「イ」[i]は、後続の名詞との結合を考えると、動詞「いふ」【言う】の連用形に由来すると思われる。「いふ」は後続名詞の上位語と見ることもできよう。琉歌においては音数律を適合化するための役割のほうが大きい。

- (83)い-ことば【言葉】：ことば【言葉】([i]の付加)^(#18)
 長形：イクトゥバ [ikutuba] 短形：クトゥバ [kutuba]
 全2261:一期たのまらぬ 花とてやり言ゆたる 人の言葉や なまど知ゆる
 第3句(8拍)：フィトゥヌ イクトゥバヤ [hwitunu 'ikutuba]
 全2330:なまど思知ゆる さやか照る月の 影よ恨みたる 人の言葉
 第4句(6拍)：フィトゥヌ クトゥバ [hwitunu kutuba]

- (84)い-はなし【い話】：はなし【話】([i]の付加)

長形：イファナシ [ihwanasji] 短形：ハナシ [hanasji]
 全1749:昔ごとんでど いはなしも聞きやる ふだかちやの御代も めぐて来ちやさ
 第2句(8拍)：イファナシン チチャル [ihwanasjiN cijcjaru]
 全2265:いつも喜びの 話聞きほしやの ひまびまや互に よらてたばうれ
 第2句(8拍)：ハナシ チチブシャヌ [hanasji cijcibusjanu]

2. 3. 3. 接辞「シ」[sji]の付加

接辞「シ」[sji]は動詞「す」【為】の連用形に由来すると思われるが、その語彙の意味は薄れてきている。琉歌では音数律適合化の役割が大きい。例(85)は接頭辞、例(86)は接尾辞の例。

- (85)し-なさけ【し情】：なさけ【情】([sji]の付加)
 長形：シナサキ [sjinasaki] 短形：ナサキ [nasaki]
 全2659:人のしなさに 深山忘れため ゆるせはも飛ばぬ 籠の鳥や

第1句（8拍）：フィットゥヌ シナサキニ [hwitunu sjinasakinji]

全2510：いつす忘れゆが 朝夕わか親の 心慰める 人のなさけ

第4句（6拍）：フィットゥヌ ナサキ [hwitunu nasaki]

(86) わらべ-し【童し】：わらべ【童】（[sji] の付加）

長形：ワラビシ [warabisji] 短形：ワラビ [warabi]

全2567：年の数読どて 大人ほしやしゆたる わらべしの真肝 いつもあらな

第3句（8拍）：ワラビシヌ マヂム [warabisjину mazjimu]

全 61：月も照りきよらさ 糸とまいれ童 露の玉ひろて 貫きやり遊ば

第2句（8拍）：イトゥ トゥメリ ワラビ ['itu tumeri warabi]

上記のほかに、接頭辞「お-」【御】「ウ」、「み-」【御】「ミ」、「ま-」【真】「マ」などに対しても、敬意・丁寧・賛美の付加のみならず、音数律調節の機能を見ていく必要があるだろう。その他、2拍以上の美称辞や、指小辞「ぐわ」【小】「グワ」なども同様である。

3. 語彙的変種

語彙的変種とは、意味的にほぼ同じであるが形式は異なる語同士を使い分けることで、音数律に合致させているものをいう。異なる形式の語は完全に同義とは断言できないので、厳密には、音数律に合致させるという理由だけでは済まないのかもしれない。ただ、その類義語同士の語形の長さに注目すると、やはり長形と短形に分けられるので、音数律の制約もかなり働いているのではないかと思われるのである。

(87) あひだ【間】：ま【間】

長形：ゑダ ['weda] 短形：マ [ma]

全1979：自由ならぬ恋路 浮世小車の めぐて来る間の 待ちのくりしや

第3句（8拍）：ミグティ クル ゑダヌ [miguti kuru wedanu]

全 351：しばし片時も 忘る間やないらぬ かなし面影と 一期つれて

第2句（8拍）：ワスィル マヤ ネラヌ [wasiru maja neranu]

(88) あるじ【主】：ぬし【主】^(註19)

長形：アルジ ['aruzji] 短形：ヌシ [nusji]

全 355：染めて色つかぬ かなのあめ世界に 情あて染めれ 紺屋の主

第4句（6拍）：クヤヌ アルジ [kujanu 'aruzji]

全 564：^{かひみづ}通水の山や 一人越えて知らぬ 乗馬と鞍と 主と三人

第4句（6拍）：ヌシトウ ミチャイ [nusjitu micjai]

(89)うはさ【噂】：さた【沙汰】

長形：ウワサ ['uwasa] 短形：サタ [sata]

全1690：千代のかれよしの 小松引くけふや 野辺のもろ人も 雪のうはさ

第4句（6拍）：ユチヌ ウワサ ['jucjinu 'uwasa]

全2064：泣きゆて恨みゆすが 笑て沙汰しゆんで 語てたべめしやうれ 夜半のお月

第2句（8拍）：ワラティ サタ シュンディ [warati sata sjuNdi]

(90)うまが【孫】：まご【孫】

長形：んマガ ['Nmaga] 短形：マグ [magu]

全2671：大人なててやり 遊び忘れられめ 遊び庭の片手 むまが片手

第4句（6拍）：んマガ カタディ ['Nmaga katadi]

全1730：孫の真実や 杖につきめしやうち 百の坂までも のぼていもうれ

第1句（8拍）：マグヌ シンジツィヤ [magunu sjiNzjicija]

(91)おと【音】：ね【音】

長形：ウトウ ['utu] 短形：ニ [nji]

全2531：義理もしなさけも 節節にこめて かき鳴らす琴の 音のしほらしや

第4句（6拍）：ウトウヌ シュラシャ ['utunu sjurasja]

全2204：よしむ言の葉や 琴の音にのせて 我袖ひくよりも 別れぐれしや

第2句（8拍）：クトウヌ ニニ ヌシティ [kutunu njinji nusjiti]

(92)おとづれ【訪れ】：たより【便り・頼り】

長形：ウトウズィリ ['utuziri] 短形：タユイ [tajui]

全501：ませ内のくりしや 思ひ知りめしやうち 風の音信や 聞かちたばうれ

第3句（8拍）：カジヌ ウトウズィリヤ [kazjinu 'utuzirija]

全2048：渡海の上に我身や 浮く舟の心 こがれとて待ちゆる 風のたより

第4句（6拍）：カジヌ タユイ [kazjinu tajui]

(93)お-には【御庭】：お-みや【御庭】^(註20)

長形：ウニワ ['unjiwa] 短形：ウナ ['una]

全1661：九重のお庭 巖抱き松の さかるうれしさや 枝葉までも

第1句（8拍）：ククヌイヌ ウニワ [kukunuinu 'unjiwa]

全1278：百敷のお庭に 枝も葉も茂て みどりさしのべる 松のきよらさ
第1句（8拍）：ムムシチヌ ウナニ [mumusjicjinu 'unanji]

(94)かたき【敵・仇】：てき【敵】

長形：カタチ [katacji] 短形：ティチ [ticji]
全 720：かたき討取たる けふのほこらしやや すぎし父母も 嬉しやめしやいら
第1句（8拍）：カタチ ウチトウタル [katacji 'ucjituraru]
全 909：思子^{おもぐわ}取り戻ち 敵討たんともて 哀れ商人に やつれ出づる
第2句（8拍）：ティチ ウタン トウムティ [ticji 'utaN tumuti]

(95)ぐすく【城】：しろ【城】

長形：グスイク [gusiku] 短形：シル [sjiru]
全 875：今帰仁の城 しもなりの九年母 しけま乙樽が めきやいはきやい
第1句（8拍）：ナチジンヌ グスイク [nacjizjiNnu gusiku]
全2448：見る人のあまり 恨めらなおきゆめ いつも勝連の 城に向かて
第4句（6拍）：シルニ ンカティ [sjirunji Nkati]

(96)こころ【心】：きも【肝】

長形：ククル [kukuru] 短形：チム [cjimu]
全2994：親のためしちやる 心からさらめ かにある百果報の つきやることや
第2句（8拍）：ククルカラ サラミ [kukurukara sarami]
全2757：肝からがやゆら 口先がやゆら 袖よ引きとめる ぶりのしぎま
第1句（8拍）：チムカラガ ヤユラ [cjimukaraga jajura]

(97)ごしゃん：つゑ【杖】

長形：グシャン [gusjaN] 短形：ツイキ [ciwi]
全2759：肝や蚊坂 先立ててをすが ごしゃんとまいゆんで 遅くなたさ
第3句（8拍）：グシャン トウメユンディ [gusjaN tumejuNdi]
全1730：孫の真実や 杖につきめしやうち 百の坂までも のぼていもうれ
第2句（8拍）：ツイキニ ツイチ ミショチ [ciwinji cicji misjocji]

(98)すがた【姿】：かげ【影】

長形：スイガタ [sigata] 短形：カジ [kazji]
全2511：いろいろの姿 照り写す鏡 よしあしのあとも ないらぬきよらさ

第1句(8拍):イルイルヌ スイガタ ['iru'irunu sigata]

全2536:心あてみがち くもらすな鏡 影写す間の 宝だいのもの

第3句(8拍):カジ ウツス 魚ダヌ [kazji 'ucusu 'wedanu]

(99)てだ:ひ【日】

長形:ティダ [tida] 短形:フィ [hwi]

全1195:若狭大道に 引きよとめおかな 空に行き過ぎる お月おてだ

第4句(6拍):ウツィチ ウティダ ['ucicji 'utida]

全2624:月と日の光 かくす雲霧や 吹きはらてたばうれ 空のみかぜ

第1句(8拍):ツィチトゥ フィヌ フィカリ [cicjitu hwinu hwikari]

(100)なみだ【涙】:なだ【涙】

長形:ナミダ [namida] 短形:ナダ [nada]

全 469:涙より外に い言葉やないらぬ つめて別れ路の 近くなれば

第1句(8拍):ナミダユイ フカニ [namidajui hwukanji]

全 327:昔覚出しやり ながめればやがて 涙に月かげや 曇て見らぬ

第3句(8拍):ナダニ ツィチカジヤ [nadanji cicjikazijja]

(101)みやげ【土産】:つと【苞】

長形:ミヤギ [mijagi] 短形:ツィトゥ [citu]

全 547:里やあちや出船 ののみやげしやべが かれよしの歌ど みやげしやべら

第2句(8拍):ヌヌ ミヤギ シャビガ [nunu mijagi sjabiga]

全 127:潮汲みゆんすれば 月も汲み移ち わが宿のつとに なるがうれしや

第3句(8拍):ワガ ヤドゥヌ ツィトゥニ [waga jadunu citunji]

(102)もろこし【漢土】:たう-ど【唐土】

長形:ムルクシ [murukusji] 短形:トオドゥ [toodu]

全1773:拜で覚出しゆさ 昔唐土の 民と楽しだる 玉のうてな

第2句(8拍):ムカシ ムルクシヌ [mukasji murukusjinu]

全1950:里が庭花や 物も言やんばかり 唐土うち向かて 笑て咲きゆさ

第3句(8拍):トオドゥ ウチンカティ [toodu 'ucjiNkati]

(103)や-はん【夜半】:よ-は【夜半】

長形:ヤファン [jahwaN] 短形:ユワ [juwa]

全 508：枕ならべたる 夢のつれなさや 月やいりさがて 冬の夜半

第 4 句 (6 拍)：フユヌ ヤファン [hwujunu jahwaN]

全2405：恋し明津浦の 友呼びゆる千鳥 鳴く声聞く夜半や 眠りぐれしや

第 3 句 (8 拍)：ナククィ チク ユワヤ [nakukwi cjiku juwaja]

そのほか、

いとま【暇】「イトウマ」： ひま【暇】「フィマ」

うしろ【後】「ウシル」： こし【後】「クシ」

こがね【黄金】「クガニ」： きん【金】「チン」

なり【実り】「ナイ」： み【実】「ミ」

にしき【錦】「ニシチ」： きん【錦】「チン」(全2605第2句?)

はね【羽】「ハニ」： は【羽】「ファ」「ハ」

よだ【枝】「イィダ」： え【枝】「イィ」

よる【夜】「ユル」： よ【夜】「ユ」

などの使い分けにも、音数律の要因が関わっているのかもしれない。

4. 結びにかえて：音数律を優先させた訓み方

本稿では、いくつかの手法が琉歌の音数律適合化に作用していることを考察してきた。ここでは、結びにかえて、琉歌の訓みのオーソリティーとなっている『琉歌全集』の訓みに対して、より音数律にかなった訓みを提言したい。以下、いくつかの例を挙げる。

まず最初の例(104)。

(104)全2523：開静鐘や鳴ても おぞむ人やをらぬ 一期この世界や 闇がやゆら

この第2句を『琉歌全集』では「ウズム フィトウヤ ウウラン」[‘uzumu hwituja wuraN]と訓む。これでは9拍となり、必要な8拍より1拍多い。そこで、例(14)に倣い、「フィトウ」[hwitu]【人】の部分¹を短形の「チュ」[cju]で訓めば、「ウズム チュヤ ウウラン」[‘uzumu cjuja wuraN]でちょうど8拍となり、音数律に合致する(類例・全2069第3句、全2652第2句)。

「ウズム フィトウヤ ウウラン」 [‘uzumu hwituja wuraN] (9拍)

「ウズム チュヤ ウウラン」 [‘uzumu cjuja wuraN] (8拍) ○

二番目の例(105)を挙げる。

(105)全 397：いかれいかれ二才衆 二三十どいかる 四五十になれば 大人だいのもの

この第1句を『琉歌全集』では「イカリ イカリ ニセシュ」[’ikari ’ikari njisesju]と訓むが、これも9拍で8拍より1拍多い。この場合、2番目の「イカリ」[’ikari]における最初の狭母音「イ」[i]は発音せずに、「イカリカリ ニセシュ」[’ikarikari njisesju]と発音するほうが音数律に合致する。『琉歌百控』の表記では「^{イカレ}勢れカリ」となっており、外間守善1997：383でも「イカリカリ ニセシュ」という訓みが当てられている（類例・全784第3句、全1609第1句）。

(106)^{イカレ}勢れかり二才衆 二三十どいかる 四五十に成は ^{オトナ}強たいもの（『琉歌百控』47番歌）

「イカリ イカリ ニセシュ」 [’ikari ’ikari njisesju] (9拍)

「イカリカリ ニセシュ」 [’ikarikari njisesju] (8拍) ○

三番目の例(107)。

(107)全 513：末吉のかいじやう鐘や 首里のかいじやうともて 里起ちやらち 我肝やみぬさ

この第1句を『琉歌全集』では「スイユシヌ ケジョガニヤ」[suijusjину kezjoganjija]と訓み、10拍となって通常必要な8拍より2拍も多くなっている。そこで、【末吉】の日常語（首里方言）の音形に注目してみよう。【末吉】は、日常語（首里方言）では「スィーシ」[siisji]と発音される（国立国語研究所1963：471）。これに琉歌の「長音禁止制約」を適用すれば「スィシ」[sisji]となる。第1句を「スィシヌ ケジョガニヤ」[sisjину kezjoganjija]と訓めば、ちょうど8拍にできる（類例・全2779第1句）。^(#21)

「スイユシヌ ケジョガニヤ」 [suijusjину kezjoganjija] (10拍)

「スィシヌ ケジョガニヤ」 [sisjину kezjoganjija] (8拍) ○

最後に、もう一つ例を挙げてみよう。

(108)全1863：沖繩と八重山 緑の糸はへて 面影の立たば 互に引かな

この第1句を、『琉歌全集』では、「おきなは」【沖繩】を「ウチナ」[’ucjina]とし、「ウチ

ナトゥ ヤイマ」[ʼucjinatu jaima]と訓んでいるが、これでは7拍で必要な8拍到1拍足りない。音数律適合化のためには、「1. 1. 3. 2. w音脱落と関わるもの」における「w音脱落阻止」に倣って、「ウチナワトゥ ヤイマ」[ʼucjinawatu jaima]で訓むべきではないだろうか。^(註22)

「ウチナトゥ ヤイマ」 [ʼucjinatu jaima] (7拍)

「ウチナワトゥ ヤイマ」 [ʼucjinawatu jaima] (8拍) ○

以上のように、音数律を優先させた訓みのほうが、『琉歌全集』の訓みよりも琉歌作者自身の発音に合致していたのではないかと期待して、本稿を終えたい。

(注1) 本稿では「拍」という用語を「モーラ」と同義で使用する。

本稿で用いる簡易音声表記は、上野善道1993:46を参考にした。注意すべきものを掲げておく(IPAとの対応等)。仮名表記も含めて、『琉歌全集』で用いられている標音記号とは若干異なるので注意されたい。なお、長母音は母音を重ねて表記する([aa]など)。

ʼ—[ʔ] (声門閉鎖音)

hw—[ɸ] (両唇摩擦音)

sj—[ʃ] (硬口蓋歯茎無声摩擦音)

zj—[dʒ]・[ʒ] (硬口蓋歯茎有声破擦音・有声摩擦音)

cj—[tʃ] (チ=cji)

c—[ts] (ツイ=ci)

nj—ニ(ヤ)の子音

hj—ヒ(ヤ)の子音

N—撥音(位置を問わず全てNを用いる)

後続子音と同一記号—促音

注意すべき仮名表記は以下の通り。喉頭化した半母音や撥音はひらがな表記。

ʼja—や ja—ヤ ʼN—ん N—ン

ʼwi—ゐ wi—ヰ

ʼwe—ゑ we—ヱ

ji—イィ

wu—ウゥ

本稿は琉歌形式の音数律について論じたものだが、『おもろさうし』の音数律については、外間守善・西郷信綱1972：550、高橋俊三1991：151-173、松永明1998、琉歌形式の成立論については、伊波普猷1975[1927]：39-46、金城朝永1971[1954]：61-100、仲原善忠1977[1959]：72-74、服部四郎1971[1959]、比嘉春潮1971[1963]：53、比嘉実1975：98-107、小野重朗1977：217-229、玉城政美1991：103-104、外間守善1995：325-335 などの考察がある。

(注2) 複合語の扱いについては、かなりの問題が残っている。複合語の形成によって音脱落が起こっているとき、そこに関与するのはまず複合語の規則であって、音数律の規則ではない。たとえば、例(20)「トゥヌチ」[tunucji]【殿内】は、元来は「との-うち」であつたろうが、その複合語が熟して「トゥヌチ」[tunucji]となった段階では、もはや分割できない一つの語である(さらに「トゥンチ」[tuNcji]と発音されてゆく)。短形「トゥヌチ」[tunucji]から長形「トゥヌウチ」[tunu'ucji]を再構成する可能性は低いと思われるし、事実そのような用例は見つからない。例(8)「ユチヌル」[jucjinuru]【雪の色】、例(22)「シマヌラ」[sjimanur-a]【島の浦】も、かなり複合語性が高いと思われるので、本稿では「語中音脱落」と同類に捉える。

(注3) あか-いと【赤糸】にも「アカチュ」[akacju]という「アカイトウ」[aka'itu]が縮約した音形があるけれども、「アカイトウ」[aka'itu]という長形の用例は見つからなかった。以下は「アカチュ」[akacju]の例。

全 437：芋の葉の露や 真玉よかきよらさ 赤糸あぐまきに 貫きやいはきやい

第3句(8拍)：アカチュ アグマチニ [akacju 'agumacjinji]

(注4) つき-の-よ【月の夜】「ツィチヌユ」[cicjinuju]という、さらに1拍長い形も考慮に入れるべきかもしれない。

全 797：誰が宿がやゆら 月の夜のよすが ひくや三味線の 音のしほらしや

第2句(8拍)：ツィチヌ ヌヌ ヌスイガ [cicjinu junu jusiga]

(注5) 【百歳】には「ヒャクセ」[hjakuse]という訓みもある。

全 395：子孫そろて 願たごとかなて 大主の百歳 お祝しやべら

第3句(8拍)：ウフヌシヌ ヒャクセ [uhwunusjinu hjakuse]

(注6) (注2)参照。このような複合語の要素は、母音の狭広の違いこそあれ、複合語形成の観点から、「1. 1. 3. 3. 語形成に関わるもの」と併せて考慮すべきものかもしれない。

(注7) おや【親】が複合語の前部要素となると、音変化した形「ゑ-」[’we-]が出てくる。

全2499：山原と親国 こがとへぢやめれば いきやがなていまら 音も聞かぬ
第1句(8拍)：ヤンバルトゥ ゑグニ [jaNbarutu ’wegunji]

(注8) 「お-ふね」ではなく、接頭辞に「み」【御】を用いた「み-ふね」の例もある。

全1554：軒や苔むして 年やふる寺の 池にすみ渡る 月のみ舟
第4句(6拍)：ツイチヌ ミフニ [cicjinu mihwunji]

(注9) 「ならはし」【習わし・慣わし】「ナラワシ」[narawasji] という語も考慮に入れれば、さらに1拍伸ばせる例となる。

全 382：無情に渡られめ 人のならはしの たとひ義理の上の 浮世やても
第2句(8拍)：フィトゥヌ ナラワシヌ [hwitunu narawasjinu]

(注10) まはへ-かぜ【真南風風】「マフェカジ」[mahwekazji] という「2. 3. 1. 上位語の付加」による例もある。この場合の上位語は「風」。

全2145：真北押す風や わがいやりともれ 真南風や無蔵が いやりともら
第3句(8拍)：マフェカジヤ ンゾガ [mahwekazjija Nzoga]

(注11) このような「長音禁止制約」の適用は、長い母音のみならず、長い子音にもある。次の「くわ【子】」には長短の使い分けがあると言える。

くわ【子】([kk]の短縮)

長形：クワ [kkwa] 短形：クワ [kwa]

全2762：九つの年に 母になてをすが 子の父親や 誰がやゆら
第3句(8拍)：クワン チチウヤヤ [kkwanu cijici’ujaja]

全 588：さらばこれまでか 親と子の仲も わかて草枕 露にぬれて
第2句(8拍)：ウヤトゥ クワン ナカン [’ujatu kwanu nakaN]

(注12) 他の複合語要素と付く「-なは【縄】」にも長短両形がある。

長形：-ナワ [nawa] 短形：-ナ [na]

全1944：恋の糸縄に つながれて小舟 浮世渡地の 潮時むすで
第1句(8拍)：クイヌ イトウナワニ [kuinu ’itunawanji]

全 459：白縄糸縁に はたとのかれらぬ つめて寄りまさる 無蔵がおそば

第1句（8拍）：シラナ イトゥインニ [sjirana 'itujiNnji]

（注13）もも-うらめしき【百恨めしき】の例、全1164第4句は、ムム [mumu]（2拍）+ラミシャル [ramisjaru]（4拍）と語形が分析でき、4拍禁止制約に反する例外的用例。ただし、複合語化がかなり進んで（その証拠に母音 [u] が脱落している）、そのような分析は琉歌作者の意識の中にはもはや無く、通常の音数律（3拍+3拍）に従って、「ムムラ[mumura] | ミシャル [misjaru]」と区切って発音された可能性が高いと思われる。

（注14）「産み字」という用語は訳書、ネフスキー1998：9による。動詞の複合語においても、音数律を合わせる際に、「ユ」[ju] が挿入されることがある。

全 511：暁の別れ 惜しむ故からど なきよはじめゆさ とりの先に

第3句（8拍）：ナチュ ハジミユサ [nacjiju hazjimijusa]

（注15）「ワミノ」[waminu] という3拍の言い方もある。

全1393：夢に起されて 覚えず戸は明けて 月に恥かしや 我身の心

第4句（6拍）：ワミノ ククル [waminu kukuru]

また、「私は」に当たる言い方にも、「ワヌヤ」[wanuja]（あるいは、ワンヤ[waNja]、ワミヤ [wamija]）と「ワネ」[wane] の長短両形がある。

長形：ワヌヤ [wanuja] 短形：ワネ [wane]

全 373：波荒さあらば 風荒さあらば いきやし思暮らち わぬや待ちゆが

第4句（6拍）：ワヌヤ マチュガ [wanuja macjuga]

全2068：七門越えて九門に わないお待ちしゆすが なまで来ぬ里や にやよそつれて

第2句（8拍）：ワネ ウマチ シュスイガ [wane 'umacji sjusiga]

（注16）さらに、1拍のニ [nji] 格も考慮に入れる必要がある。

全2358：山原に行けば 哀れどや至極 見る方やないらぬ 海と山と

第1句（8拍）：ヤンバルニ イキバ [jaNbarunji 'ikiba]

この第1句（8拍）において、「イキバ」（3拍）へ続く語形は、5拍でなければならない。やま-ばる【山原】「ヤンバル」（4拍）では、あと1拍しか余地が無いので、向格として「ニ」（1拍）が選ばれたのであろう。

また、比嘉弘美1991：53によれば、ニ格は時間を表す名詞にも付くことがある。その場合、「ニ格：ゼロ格」で音数律の調節ができる。適例は見つけられなかったが、可能性としては大いにありうる。

(注17) 次の「しば-け【柴木】：しば【柴】」も上位語付加の関係だが、「しば-け」が「藪肉桂」という特定の種を指すのに対して、「しば」は「山野に自生する雑木」という不特定の木々を指している（沖繩古語大辞典編集委員会1995：327）。このように、上位語付加によって意味が変化する場合には、音数律適合化ではなく、まず意味的な選択要因を観るべきであろう。参考のために掲げておく。

しば-け【柴木】：しば【柴】 上位語：木

全 888：しば木植ゑておかば しばしばといまうれ 真竹植ゑておかば またもいまうれ
第1句（8拍）：シバキ むティ ウカバ [sjibaki 'witi 'ukaba]

全 697：なかな恨めゆら 炭がまの煙 誰が知ゆが恋の 柴の山路
第4句（6拍）：シバナ ヤマジ [sjibanu jamazji]

(注18) こと-の-は【言の葉】「クトゥヌファ」[kutunuhwa] という別の長形もある。

全1676：桜木の蔭に うちよらて語る 友の言の葉や 梅の匂
第3句（8拍）：ドゥシヌ クトゥヌファヤ [dusjinu kutunuhwaja]

(注19) 場合によっては、1拍語「しゅ」【主】「シュ」[sju] も考慮に入れねばなるまい。

(注20) 首里城正殿前の空間を日常語（首里方言）では「ウナー」[ˈuna] と呼ぶが、これは「お-には」ではなく、「お-みや」に由来すると考えられている（沖繩古語大辞典編集委員会1995：160）。しかし、「ウナー」には【御庭】という漢字が当てられることが多く、これによって全1661の「ウニワ」[ˈunjiwa] という訓みも可能になったと思われる。

(注21) 丁鋒1997：58にも「9. 末吉日昔石 [siʃl] ↔ [si:ʃi]」とある。琉歌の第1句は、10拍の用例もいくつか見られる点で問題があるけれども、可能性の一つとして「スイシ」[sisji] の訓みを挙げておきたかった。また、明らかに「スイユシ」[suijusji] という長形で音数律に合致する例もある。

全2637：日にこまをとて 仰ぎ拝みやべら 行衛末吉の 神のまもり
第3句（8拍）：ユクイ スイユシヌ [jukui suijusjinu]

(注22) 「ウチナ」[ˈucjina] という短形で音数律に合致する例もある。

全1936：ことし行き八重山 あけて来やう沖繩 むすである縁の いとの上から
第2句（8拍）：アキティ クヨ ウチナ [ˈakiti kujo ˈucjina]

○引用文献

- 伊波普猷 1975 [1927] 「日本文学の傍系としての琉球文学」 『伊波普猷全集第9巻』 服部四郎・仲宗根政善・外間守善編 平凡社：pp.3-58
- 伊波普猷 1975 [1933] 「琉球の方言」 『伊波普猷全集第8巻』 服部四郎・仲宗根政善・外間守善編 平凡社：pp.508-549
- 上野善道 1993 「喜界島方言の体言のアクセント資料」 『アジア・アフリカ文法研究』21 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：pp.41-160
- 沖縄古語大辞典編集委員会 1995 『沖縄古語大辞典』 角川書店
- 小野重朗 1977 『南島歌謡』 NHKブックス275 日本放送出版協会
- 金城朝永 1971 [1954] 「琉球民謡の起源と変遷」 『沖縄文化論叢4 文学・芸能編』 外間守善編 平凡社：pp.54-110
- 金城朝永・服部四郎 1955 「附、琉球語」 『世界言語概説 下巻』 市河三喜・服部四郎 共編 研究社：pp.307-356
- 国立国語研究所 1963 『沖縄語辞典』 大蔵省印刷局
- 島袋盛敏・翁長俊郎 1968 『標音評釈 琉歌全集』 武蔵野書院
- 高橋俊三 1991 『おもろさうしの国語学的研究』 武蔵野書院
- 玉城政美 1991 『南島歌謡論』 弧琉球叢書1 砂子屋書房
- 千葉聡 1998 「琉歌定型のリズム」 『沖縄学』第2号 沖縄学研究所紀要：pp.45-55
- 丁鋒 1997 「『琉球記』における琉球地名の対音解説」 『琉球の方言』21 法政大学沖縄文化研究所：pp.56-84
- 仲原善忠 1977 [1959] 「口承文芸」 『仲原善忠全集第2巻 文学篇』 沖縄タイムス社：pp.55-74
- 西岡敏 1993 「琉歌・組踊語における『無い』の活用」 『沖縄文化』78 (第28巻 2号) 沖縄文化協会：pp.27-39
- 西岡敏 1996 「喜界島八月踊り歌テキストにおける音数律制約」 『琉球の方言』21 法政大学沖縄文化研究所：pp.43-55
- ネフスキー、ニコライ.A. 1998 『宮古のフォークロア』リザア. グロムコフスカヤ編 狩俣繁久・渡久山由紀子・高江洲頼子・玉城政美・濱川真砂・支倉隆子共訳 弧琉球叢書3 砂子屋書房
- 服部四郎 1971 [1959] 「琉球語および琉歌について」 『沖縄文化論叢4 文学・芸能編』 外間守善編 平凡社：pp.311-327
- 比嘉春潮 1971 [1963] 「琉球語の文芸」 『沖縄文化論叢4 文学・芸能編』 外間守善編 平凡社：pp.42-53
- 比嘉弘美 1991 「琉歌の名詞の格」 『沖縄文化』74 (第26巻 2号) 沖縄文化協会：pp.32-73
- 比嘉実 1975 「琉歌の源流とその成立」 『沖縄文化研究』2 法政大学沖縄文化研究所編：pp.97-142
- 外間守善 1995 『南島の抒情—琉歌』 中公文庫
- 外間守善 1997 「琉歌百控」 『田植草紙 山家鳥虫歌 鄙廼一曲 琉歌百控』 新日本古典文学大系62 岩波書店：pp.365-571、658-682
- 外間守善・西郷信綱 1972 『おもろさうし』 日本思想大系18 岩波書店

松永明 1998 「あおりやへが節を考える」 沖縄学研究所第21回研究発表会 (1998年10月22日)
配布資料

[付記] 松永明氏(法政大学非常勤講師、沖縄文化研究所奨励研究員)には、拙論の草稿を
読んでいただき、貴重なコメントをたまわった。厚くお礼申し上げます。

(にしおか さとし・東京大学大学院)